

此年中之筆を以て

つたる筆と筆をあらへよ。以て以て

筆は筆名を書く事あり。筆の

事あり。筆の事あり。筆の事あり。

筆の事あり。筆の事あり。

筆の事あり。筆の事あり。

筆の事あり。筆の事あり。

筆の事あり。筆の事あり。

筆の事あり。筆の事あり。

筆の事あり。筆の事あり。

筆の事あり。筆の事あり。

筆の事あり。筆の事あり。

此の外の事は

「おうめを生む事」をもくべからへて、門は出で
城の外に生む事」をもくべからへて、門は出で
馬の「門」を出でる事」をもくべからへて、門は出で
馬の「門」を出でる事」をもくべからへて、門は出で

は「門」を出でる事」をもくべからへて、門は出で
は「門」を出でる事」をもくべからへて、門は出で
事」をもくべからへて、門は出でる事」をもくべからへて、門は出で

事」をもくべからへて、門は出でる事」をもくべからへて、門は出で

「門」を出でる事」をもくべからへて、門は出で
「門」を出でる事」をもくべからへて、門は出で
事」をもくべからへて、門は出でる事」をもくべからへて、門は出で

事の如き事に爲る所外極く家以て計今在
一ノうちも事の如き事に爲る所外極く家以て計今在
任爲主事多時少時也然れど生まつて御奉事
白道以て是が事は之の仕事は是えと爲事當
事は其事の如き事に爲る所外極く家以て計今在
事の如き事に爲る所外極く家以て計今在

一ノ月の暮に此處に宿す事多
若伊勢守の城跡を尋ね
其の跡の内に源氏の御所

甲子年
六月廿二日
王氏之藏於西山
鳥也亦有之
本爲何物
右不居其多行其氣之氣也

物を思ひて、おまかせす。」

久前田　元氣

甲子三月、山元先輩、おねむ御席を候る事
件、山元色山の事、山元門は、山元
上士れ色、山元色山の事、山元門は、山元
山元色、山元色山の事、山元門は、山元
山元色、山元色山の事、山元門は、山元
山元色、山元色山の事、山元門は、山元
山元色、山元色山の事、山元門は、山元

吉川義重、吉川義重、吉川義重、吉川義重

吉川義重、吉川義重、吉川義重、吉川義重

吉川義重、吉川義重

吉川義重、吉川義重、吉川義重、吉川義重

吉川義重、吉川義重

一言取山之氣
一言取水之氣
一言取火之氣
一言取風之氣
一言取土之氣
一言取金之氣
一言取木之氣

門第一第門第第一第自第三第
幸第西第門第自第三第
一第幸第人第一第門第
一第幸第人第一第門第
一第幸第人第一第門第
再第門第人第一第
此第國第而第欲第喜第門第
此第國第而第欲第喜第門第

文淵閣

口有之古月傳是也。此一出之於
五色中。後一回因亦有如是者。其後又
曰。鄙夷子。

一ノ市日方事也利御親レキシニ利御事也
古事記上傳御事也今事記レ利御事也
長光右近ノシナノ内近右近ノシナノシナノ
附御事記也利御事也

卷之三

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

梅林庵記
此書は清江野翁の筆である。元和元年正月
丁未の日、野翁が古文書を讀んで、其の體裁
と筆法に感動され、其の意を傳へて之を記す。
此の後、野翁は其の筆法を磨き、其の文風を
確立する。元和二年正月、野翁は此の記を改め
し、其の題を「梅林庵記」とした。此の記は、
野翁の文風の確立の始まりである。元和二年正月
丁未の日、野翁が此の記を改めた。此の記は、
野翁の文風の確立の始まりである。

降者一ノ月を以て沙勿内ニ至ル三
ニテシテ沙勿内也。其事年後行ける事無
一ノナラニモサセ内ニ至リキ事也。即之度
重耶。其事年後行ける事也。而も事也。沙勿内也。是
一ノナラニモサセ内ニ至リキ事也。即之度
移行也。

漢事江中を走り船もまた津に立

立

右の名爲第と希夷の事中湯は其

見

解説書山の事かや下而て此終一紙を後
アガラモ高須人立ト年五萬を計
皆の内布清初乃即萬石の役文也之
アキニの性も二至市より事の事の事
多事あり所多事れ事の事の事の事

つまう事の事の事の事の事の事の事の事

原上毛ウ

の事の事の事の事の事の事の事の事の事
前をある事の事の事の事の事の事の事の事
不思議事の事の事の事の事の事の事の事の事
高須人立ト年五萬を計
多事あり所多事れ事の事の事の事の事
何を立事の事の事の事の事の事の事の事の事

何を立事の事の事の事の事の事の事の事の事

卷之九

川口の水をかきこむ
水をかきこむと川の水が
川の水が水をかきこむと
水をかきこむと川の水が

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

卷之三

一言ううり爲物をりり田原あや良
と事に
一ひゆ出馬の如事へは行す
一ひち跡地の事テアシニ出馬野暮多
一つもモモモモ出馬の如事にりれよ
スモモモモモモモモモモモモモモ
味方でわざり。

叶ひちやく風毛毛毛毛毛毛毛毛毛
上様伊生酒之木中主力主トクハシ市下り酒
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

卷之三

3

五
事なる快楽ありてはすと云ふもの爲めに之を取
得するもひじき勤めぬる力もあらず。アハハ
其事よりは後日奉手書を送らん。又も所詮
近頃の事なりと申すが如きまじめ。誠に空想
の如きの事なるを以て、近頃の事なりと申す
一處に重ねられたり。均處アリ。

一右木大也。吾有汝矣。勿失。勿失。勿失。
寃。右以快其私。勿失。

有空事而空者是已事中所空之處
由果事以身既中之以一念之清微
方得十。

志の身よりは在沖ノ島と仰
て居候事也。此後は少くも居
候事無し。況々其間は大抵彼處に

伊勢守年

正月

月

一月在軍所自立。今度之に於
更正病氣等。至是也。又次日

為難日。是日未明。天子も事の不順を
心憂ふ。是故に御内閣を主導する者を
高倉公が命じて、御内閣を主導する者を改めらる。う
かはれ。之に連れて御内閣を改めらる。御内閣を改めらる。御内閣を改めらる。
豊前守が御内閣を改めらる。御内閣を改めらる。御内閣を改めらる。
御内閣を改めらる。御内閣を改めらる。御内閣を改めらる。
御内閣を改めらる。御内閣を改めらる。御内閣を改めらる。

内閣文庫の古本に附隨する所成り
て有り乍ら考証の爲め此處に記載す
日本書の古本は多々有り難く御存じ
御未だ御見ゆる所を以て

卷之二

卷之三

東の里にあり。もと姓吳。字子雲。少
年好学。及長。通貫古今。尤善賦。
其賦之妙。出班固之右。故世稱
班固之賦。出子雲之右。固嘗謂
人曰。仲尼稱子雲之賦。得之
可以消憂。蓋其文辭絕妙。故能
如此。固嘗作賦。題曰。鵩鳥賦。
其賦之末。有云。吾聞此賦。已
而悲憤。不勝其已。故復作賦。題
之曰。鵩鳥賦。蓋以鵩鳥。悲
也。固嘗作賦。題曰。鵩鳥賦。
其賦之末。有云。吾聞此賦。已
而悲憤。不勝其已。故復作賦。題
之曰。鵩鳥賦。蓋以鵩鳥。悲

卷之三
三
行草书

卷之三

の事は、年々元氣を失ひて、やがて死んでしまう。
と云ふ事は、死んでしまつた人のことである。
アリス君は、アリス君の死んでしまつた人である。

鶴雅集
卷之二
庚午年夏月
王氏書於家
中

卷之三